

第2回日独マムルーク会議

The Second Japanese-German Workshop on Mamluk Studies 報告

去る2018年12月1日(土)～2日(日)に、早稲田大学戸山キャンパスにおいて、第2回日独マムルーク会議The Second Japanese-German Workshop on Mamluk Studiesが開催された。第1回目は2016年に東洋文庫で開催されており、今回はボン大学、早稲田大学文学部・文学研究科「中東・イスラーム研究コース」、早稲田大学イスラーム研究機構、文科省科研費・基盤研究B「13-15世紀におけるアラビア語文化圏再編の文献学的研究」(代表・佐藤健太郎)の主催によるものであった。

今回の開催趣旨と特徴は、次のようにまとめられるであろう。第一に形式面から言えば、本会議は早稲田大学とボン大学との間の歴史的な絆を背景として開催されたものである。早稲田大学は永年にわたりボン大学内にオフィスを置いてきており、現在も交換研究室を同学内に有している。そして、2016年にボン大学の学長と首脳陣が早稲田大学を訪問した折、「戦略的パートナーシップ合意(Strategic Partnership Agreement)」が調印されたが、その際に随行したボン大学副学長が、今回マムルーク会議のドイツ側を率いたステファン・コーネルマン教授であった。今回の会議も、両校の交流史を踏まえたものと位置づけることが



できよう。

また、今回の内容面としての特徴は、若手研究者や前回参加できなかった研究者に光を当てたところにある。そのことは、相互の学術交流にさらなる深みを与える結果をもたらしたのみならず、将来につながる交流の芽を育成することにもつながろう。加えて、伊藤隆郎氏(神戸大学)をモデレーターとする企画パネルを組み込み、そこに佐藤健太郎氏(北海道大学)らが西方アラブ地域(マグレブ)からの眼差しを加えた。これらによって、「マムルーク(朝)研究」がそれ自体を目的とする自己完結的な研究領域を示すのでは決してなく、時間・空間を自在に越境して、他の研究分野と相互に刺激を与える一つのプラットフォームとして機能し得ることを示せたのではなかろうか。さらに言えば、イギリスやパレスチナからの参加者を得られたのも収穫であった。

筆者自身としては、2017年秋にボン大学へ招聘されてUlrich Haarmann Memorial Lecture Seriesで講演したが、結果としてその返礼の機会ともなった。現在、我々は来年6月に早稲田大学で開催する第6回国際マムルーク会議6th Conference of the School of Mamluk Studiesの準備に追われており、



本会議の開催といかに並行させてゆくべきかについては、それなりに腐心したのであるが、(いささか失礼な表現ながら) 結果としては良い予行演習となった。

ボン大学は世界的に知られた10年にわたるマムルーク朝研究の大プロジェクトをそろそろ終えようとしており、また早稲田もイスラーム地域研

究機構に区切りをつけようとしているが、今回の真摯な学术交流がまた新たな萌芽となり、異なる形で将来に果実をもたらさんことを、心から願ってやまない。

大稔哲也
早稲田大学文学学術院教授

